

12月3日 待降節第1主日

エシ 33:14~16 Iテサ 3:12~4:2 ルカ 21:25-28,34-36

1. ルカ

今年も待降節から典礼暦の新しい一年が始まります。来たり給う再臨のキリストを迎える民として、「身を起こして頭を上げ」(v.28)で今朝のミサにご一緒に与かりましょう。キリストの血によって贖われた聖なる民である私たちの「解放の 때가近いから」(v.28)です。

人の子なる主イエスが終末の裁き主また神の国の王として来られるとき、御前に立つことが出来る聖なる民の中に私たちも確かに加えられるように……、いつも目を覚まして祈っている(v.36)教会であるところが、今年も私たち一同の第一の課題であることを、待降節第一主日の福音書は思い起こさせてくれるのです。

全世界が毎年この期節になるとその降誕を祝うイエス・キリストは、終末の裁き主また神の国の王として来られる“人の子なる主イエス”に他なりません。

2. Iテサ

“互いに愛し合う”ということは、初代教会のひととき強調されている特質であると言うことが出来ます。それはキリストの祭壇を囲んでミサをささげる新しい共同体としての教会の、存立の土台のようなものであると言ってよいでしょう。具体的な個々の教会の信者たちが“聖なる者となる”(Iテサ 4:3)とは、共にミサをささげる群として互いに助け合い愛し合うことを意味しました。

注意すべきことは、“互いに愛し合う”ことも、“聖なる者となる”ことも、共同体が共にミサをささげるということから切り離して考えるてはならないということです。来たり給うキリストを迎えるのは共にミサをささげている群としての教会であって、切り離された個人ではなく、教会こそが神の国を受け継ぐ相続人だからです。

使徒パウロはそのように理解して、テサロニケの教会にこの手紙を書き送りました。v.12の「お互いの愛」とはテサロニケで共にミサをささげている群の中での愛を指し、「すべての人への愛」とは他の町々でそれぞれのミサを共にささげているすべての群の人々への愛のことです。

場所が違って同じキリストの祭壇を囲み、同じキリストの御聖体に与かっている群は、共に神の国を受け継ぐ民として互いに愛し合い、また配慮し合い助け合うことこそが、キリストの教会のあるべき姿であることを、私たちは思いましょう。

3. ルカ

「身を起こして頭を上げ」(v.28)で来たり給う再臨のキリストを迎える信仰は、切り離された個人のもの

ではなくて、ミサをささげるすべての群、共同体としての教会の信仰です。ですから“信仰宣言”は共同体のミサの中で会衆一同が唱和するものであり、そのミサの中ですべての群が同じキリストの御聖体に与かります。そのような主の民として、私たちは今日からの新しい典礼暦の一年を歩み始めます。

諸教会のそれぞれの祭壇は、それがキリストの祭壇であるのなら、多くの祭壇ではなくてただ一つの祭壇です。すべてが一つにつながった、唯一のキリストの祭壇です。そしてその祭壇を囲んでミサをささげるすべての群はキリストにあって一つです。神の国の相続人である唯一の教会がここにあります。「目を覚まして祈りなさい」(v.36) という福音書の呼びかけが、代々の時代の諸教会のささげるミサを励まし支えて来ました。「あなたがたは、起ころうとしているこれらすべてのことから逃れて、人の子の前に立つことができるように……」(v.36) という福音書の呼びかけを、共にミサをささげるために“互いに愛し合う”群への励ましの呼びかけとして理解しましょう。

キリストの血によって贖われた聖なる民である「あなたがた」(v.28) とは、共にミサをささげるために“互いに愛し合う”群に他なりません。私たちは皆その群の中にあって、「身を起こして頭を上げ」(v.28) て、今日からの新しい典礼暦の一年を歩み始めます。

アーメン、ハレルヤ。

12月10日 待降節第2主日

バル 5:1~9 フィリ 1:4~11 ルカ 3:1~6

1. ルカ

待降節の第二と第三主日には、毎年福音書の中に記録されているバプテスマのヨハネによるキリストの到来についての証しがミサで朗読されます。この習慣は決して新しいものではありません。恐らく典礼暦が待降節から始まるように整えられたかなり早い時期から、教会は待降節の福音書の日課をこのように定めていたようです。それは教会が待降節というものを、再臨のキリストを迎えるために自らを整える期節として理解して来たことを意味しています。待降節の典礼色(祭服等の色)は四旬節と同じ紫であり、この二つの期節のミサでは“栄光の賛歌”を歌わないことになっています。

「ヨハネは……、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた」(v.3)と記されていますが、それは来たり給う救い主イエス・キリストを迎えるためでありました。

今日私たち教会がその到来を待っているのは、ナザレのイエスではなくて、再臨のキリストであります。この再臨のキリストをお迎えするために、道を整えなければなりません。「曲がった道はまっすぐに、でこぼこの道は平らに」(v.5) することが、教会に求められています。それは私たち教会がキリストを迎えるために歩んで行く道であり、神の国に至る道のことです。

そして私たち教会は今朝、かつての主イエスの第一の到来に際して語られたバプテスマのヨハネの宣教を、主の第二の到来である再臨への備えの宣教としてもう一度新しく聞いているのです。

2. バル

ルカ 3:4-6 は直接には イザ 40:3-5 の引用ですが、その一部分がバルク書にも収められていて、私たちはユダヤ人に受け継がれたイスラエルの信仰が、“エルサレムの回復の希望”という形で神の救済史の完成を描いて来たことを知る事が出来ます。そしてキリスト教会はこの旧約の信仰の世界の希望を、“救い主イエス・キリストの神の国の完成の希望”として再解釈して受け継いだのでした。

再臨のキリストは、すべて洗礼の秘跡によって罪の赦しを受けた代々の時代の神の子らを、天のエルサレムである神の国に集めてくださることでしょう(v.5-7)。そのような“共に神の国を受け継ぐ民”として、現代の教会である私たちも代々の時代の教会と共に、今年も待降節の日課に耳を傾けるのです。

3. フィリ

使徒パウロがその伝道旅行で、マケドニアに渡って最初に生まれたのがフィリピの教会でした。この教会はリディアという名の婦人の家を集会所とする群で、その後のパウロの困難な伝道を献金や会員の派遣によって直接間接に助けてました。この教会のことを思って使徒パウロは、「キリストの日に備えて、清い者、と

がめられるところのない者となる」(v.10) ようにと祈っています。

キリストの祭壇を囲んでミサを守るようになったこの群が、純粋な信仰によって成長し、福音に与かり続けているなら、「あなたがたの中で善い業を始められた方が、キリスト・イエスの日までに、その業を成し遂げてくださると……」(v.6)、使徒パウロは確信しました。言うまでもなく「その業」とは、この群が来たり給う再臨のキリストを迎えるにふさわしい民として育てられて行くことに他なりません。

4.

今朝の“集会祈願”について、解説しておきたいと思います。教会は“将来キリストと結ばれるようになる”ではありません。むしろ今ここでミサを通して祭壇のキリストに結ばれて、キリストに救われた群、キリストの民として、神の国への道を歩みます。“キリストに結ばれる”ことは、私たちの“現在”についての祈りです。

“恵み豊かな神よ、御子を迎えに急ぐわたしたちが、あなたの力に強められて罪の妨げに打ち勝ち、キリストに結ばれることができますように。”

私たちは今年も待降節から典礼暦の新しい一年を始めているのです。

アーメン、ハレルヤ。

12月17日 待降節第3主日

ゼファ 3:14~17 フィリ 4:4~7 ルカ 3:10~18

1. フィリ

使徒パウロはフィリピの教会の信者たちについて、「あなたがた一同のことを、共に恵みに与かる者と思つて、心に留めている」(1:7)と言いました。“共に神の国を受け継ぐ”者として、信仰の戦いの中を歩んでいるフィリピの人々を励ますために書き送ったこの手紙は、使徒パウロの好意と感謝と喜びの気持で満ちあふれています。「わたしは、あなたがたのことを思い起こす度に、わたしの神に感謝し、あなたがた一同のために祈る度に、いつも喜びをもって祈っています。」(1:3-4)

福音のための信仰の戦いは、キリストにある喜びに満ちています。キリストの再臨の日はいよいよ近づいているのですから、神の国の希望を目指して、「思い煩う」(v.6)のではなくて、「広い心」(v.5)で戦いを耐えて行けるように、何事につけ祈りなさい(v.6)と勧めています。

来たり給うキリストを迎えるという期待の中で福音を聞き、その期待の中で主日のミサをささげて歩んで行くということが、教会の本質的な要素であることを、いささかの割り引きもなしに現代にまで伝えてくれる役割を、典礼暦は果たし続けて来ました。待降節はその典礼暦の冒頭に置かれている期節なのです。

私たちは新約聖書を生み出した初代教会の信仰と同じ信仰に生きています。現代の教会は初代教会が受けたのと同じ罪の赦し、同じ救い、同じ約束に与かっています。

20世紀のキリスト教は、福音や信仰や救いに「多様性」を認めるという方向の妥協によって、自ら崩壊の道を歩んで来ました。新約聖書を生み出した初代教会とは別なキリスト教が可能であり、別な福音、別な救いがあるかのような錯覚によって、一般の信者たちは大いに迷わされて来たと言わねばなりません。

しかし1世紀も5世紀も16世紀も、そして21世紀も、キリストの祭壇は一つ、ミサは一つ、キリストの救いも一つなのです。私たちは「共に(神の国の)恵みに与かる者」(1:7)として、今年も待降節から典礼暦の新しい一年を歩み始めました。

2. ルカ

バプテスマのヨハネはメシアではない。メシアは“来たり給う方”である。この“来たり給う方”を迎えるために、教会は福音を宣べ伝え、洗礼を授け、主日のミサを一同でささげているのだ！ このことは初代教会が非常に力を入れて語った宣教の内容の強調点でありました。そしてやがて教会が典礼暦を待降節から始める形に整えるようになったとき、このメッセージが非常に重視されることによって、この期節の主日の福音の日課が選ばれました。私たちが今日用いている三年周期の朗読配分では、待降節第2主日と第3主日の福音の日課に、その伝統がそのまま受け継がれています。

福音とは、「今おられ、かつておられ、やがて来られる方(キリスト)」(黙 1:4)の福音に他なりません。そ

して“キリストの福音”は、私たちの希望である“神の国の福音”です。教会はこの福音を告げ知らせて行くことを、この年もその課題として与えられていることを覚えましょう。

3. ゼファ

私たち教会にとって、“来たり給うキリスト”をお迎えすること以外に、どんな救いがあると言うのでしょうか。私たちの“神の国の希望”は、旧約聖書から新約聖書へと受け継がれて来た神の救済史の中で、決して最近になって付け加えられたというようなものではありません。

ですから、数百年もキリストの誕生以前の時代に語られたゼファニヤの預言が、今年も待降節の主日のミサをささげている私たちを励ましてくれます。この希望には既に長い歴史の背景があるのです。

v.14 「娘シオンよ、喜び叫べ。イスラエルよ、歓呼の声をあげよ。

娘エルサレムよ、心の底から喜び踊れ。」

私たち教会は新しいシオンの娘、新しいイスラエル、天のエルサレムである神の国の民(ファイリ3:20)なのですから。 アーメン、ハレルヤ。

12月24日 待降節第4主日

ミカ 5:1～4a ヘブ 10:5～10 ルカ 1:39～45

1. ルカ

v.42 「あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。」

私たちは今年は待降節第4主日のミサで、“聖母マリアへの祈り”の後半を含むこのルカ福音書のテキストを聞きました。神の子イエス・キリストが人間の姿でこの世に誕生される(受肉)ために、父なる神はマリアという一人の少女をお用いになりました。それでこのマリアは、後に教会で“神の母”という特別な呼び名で人々に愛されあがめられるようになりました。エリサベトも神の恵みによって洗礼者ヨハネを身ごもっていました。彼女もまた主イエスの受肉の出来事に関連して父なる神に用いられた女でした。しかしマリアに与えられた“神の母”となる恵みと栄光は、エリサベトが受けたものにはるかに勝っていました。まだ2世紀に入るまでには数十年前に書かれたこのルカ福音書で、既にマリアは他のどんな人間にも勝る榮譽をもって賛えられています。

v.45 「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いでしょう。」

2.

教会は、その希望である再臨のキリストが、かつてこのようにしてこの世に受肉されて十字架への道を歩まれた神の子イエス・キリストその方であることを、典礼暦のこの期節にミサを通して思い起こします。

第二バチカン公会議後の新しい3年周期の聖書朗読配分が、待降節第4主日の福音書として受胎告知あるいはマリアのエリサベト訪問の箇所を用いるようにしたことは、典礼暦における待降節と降誕節との結びつきの意味をより明確にしたと思います。

21世紀に入って行くこれからの教会は、これまでの美しくて童話的な、単に過去の伝説を祝うだけのクリスマスではなくて、再臨や神の国の期待と結びついた受肉の出来事への大いなる賛美のクリスマスを作り上げて行きたいものです。この期節のミサを通して私たちは、“受肉と苦難を経て復活された主イエス・キリストの栄光に、将来与えることができるように”(本日の各年共通集會祈願)、と祈るのです。

3. ヘブ

v.10 「この御心に基づいて、ただ一度イエス・キリストの体が献げられたことにより、わたしたちは聖なる者とされたのです。」

私たちのミサの中の感謝の典礼は、イエス・キリストの十字架のいけにえの秘跡的再現であると教えられています。すべて洗礼の秘跡を受けた信者は、この奉獻に一つに結ばれて自らを捧げ(献金はその象徴でもあります)、司祭の手を通して御聖体を拝領します。

実に神の子イエス・キリストは、すべての人の救いのために御自身を「ただ一度」(v.10)「唯一のいけにえ」(10:12)として献げるために、この世に受肉されたのでした。すべて洗礼の秘跡を受けた信者は、この十字架のいけにえによって聖なる者とされています。主日のミサで行われる奉獻はこのいけにえの再現であって、私たち“聖なる者とされた会衆”はこれに与かる権利と義務を持っているのです(ミサ典礼書の総則3)。

4.

この期節には教会でも信者の家でもクリスマスの飾り付けが行われて、いろいろなパーティーやお祝いの食事で賑やかになります。教会や信者とは何の関係もない商店や街路のクリスマスのイルミネーションの方が近年はたいへん派手になって、国をあげて“クリスマス”を祝っているように見えます。

しかし教会では、降誕節でも復活節でも、お祝いの中心はミサなのです。私たち教会は今年も、その希望である再臨のキリストの、かつての受肉の出来事を祝っているのです。私たちを罪から救って永遠のいのちに与からせるために、十字架のいけにえとして御自身を献げるために来てくださった神の子イエス・キリストの降誕祭を、“ふさわしく祝うことが出来ますように。”(本日の各年共通用拝領祈願)

アーメン、ハレルヤ。

12月25日 主の降誕

イザ 52:7~10 ヘブ 1:1~6 ヨハ 1:1~18

1. ヨハ

私たちの救い主イエス・キリストは、“父の独り子である神”(v.14)です。この方が肉となって、私たち人間の世界に宿られました。私たちと同じ人間の姿になって降り、私たちの罪を取り去るために十字架への道を歩まれました。

主の降誕を祝い、今年もこの出来事が私たちすべての人間の上にもたらした大いなる課題を思いましょう。父なる神はこの独り子イエス・キリストの、地上の生涯と十字架上での死と死人の中からの復活というすべての出来事によって、この世に御自身を示されました。

“あなたは救い主イエス・キリストを受け入れ、信じますか？”という問いかけへの応答という課題が、それ以来今日に至るまでこの世のすべての人々に対して与えられて来ています。

v.12 「しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。」

洗礼の秘跡を受けてミサをささげているすべてのキリスト者も、この大いなる課題に改めて応答することを求められています。人間を照らす光である命が、救い主イエス・キリストの内にある(v.4-5)ことを理解しましょう。

v.18 「いまだかつて、神を見た者はいない。」

しかし洗礼の秘跡によって神の子となった私たちは、父の独り子である救い主イエス・キリストを理解することが出来るのです。

2. ヘブ

私たちが生きている時代は、神の大いなる救済史の終わりにさしかかっている時代です。この終わりの時代に主の降誕の出来事が起こりました。世俗の人々はクリスマスカードに描かれている飼料桶の中の赤ん坊のことを思います。しかし私たちキリスト者とその降誕を祝っている方は、「天使たちよりも優れた者」(v.4)である父の独り子であります。この方は現在は「人々の罪を清められた後、天の高い所におられる大いなる方の右の座にお着きになりました」(v.3)と私たちが聞いている、将来の神の国の王です。

私たち教会は今年も主の降誕を祝っています。それが赤ん坊のイエスの誕生を連想するだけではなくて、私たちがその死に与らせてくださった十字架のキリスト、更にその復活にも与らせてくださる(ロマ 6:4)再臨のキリストを思うときでありますように。

3.

世俗の人々であれキリスト者であれ、日本中の人々が賑やかに主の降誕を祝い終わると、もうその赤ん

2000年12月(主日C年)

坊のイエスがその後どうなって行ったかには関心を持つことなく、続くお正月の祝いの中へとクリスマスの記憶が飲み込まれて消え去って行く…… というパターンが、我が国では完全に定着しています。

しかし私たち教会はそうであってはならないのです。降誕節中に次々と私たちが迎える祝日祭日のミサの重要性を、21世紀の教会は再認識すべきです。聖家族の祝日(主日)、神の母聖マリアの祭日、主の公現の祭日(主日)、主の洗礼の祝日(主日)は、それぞれ固有のメッセージをもって私たちの降誕節を今年も豊かなものにしてくれるに違いありません。 天に栄光！地に平和！ハレルヤ！

12月31日 聖家族

サム上 1:20～28 1ヨハ 3:1-2,21-24 ルカ 2:41～52

1. 1ヨハ

v.2 「わたしたちは、今既に神の子です……。御子が現れるとき、御子に似た者となるということを知っています。」

このことを確信しつつ、私たちは今年も主の降誕を祝っています。より正確に表現するなら、“私たちは主の降誕の期節のミサを共に集まってささげています”と言うべきでしょう。ミサにはいつも神の祝福と恵みがありますが、その祝福は典礼暦の期節によって、それぞれ独自の性格を持っています。私たちは今、主の降誕の恵みと祝福の中でミサを共にささげているのです。

かつて地上に誕生し、私たちと同じ人間の姿をとられた神の子イエス・キリストは、その神の子の身分に私たちを与からせるために、御自身を十字架のいけにえとして献げられました。私たちがその現れ(終末の再臨)を待っているキリストは、かつてこの世に生を受け、そこで私たちと同じ人間として生き、私たちの罪のために十字架の上に御自身をいけにえとして献げられたあのイエス・キリストと同じ方なのです。この方が現れる時、既に洗礼の秘跡によってその死に結びつけられた私たちは、その復活の姿にも結びつけていただけることでしょう。

ミサをささげる群の中に生きる人々は、「神の掟を守る人」(v.24)です。ヨハネ文書における「互いに愛し合う」という定形句は、ミサを守るために集まる群としての教会を「造り上げていく」(エフェ4:12)ことを、際立って具体的に表現している言葉です。復活して父の右に座したもう主イエス・キリストは、ミサを通して私たちが主にお会いすることを望んでおられます。祭壇のキリストは司祭の手を通して自らの御聖体を、会衆の一人一人に分け与えてくださいます。

2. ルカ

福音書の中にわずかに記されている聖家族の物語りの断片は、神の救済史が力強く新しい段階に入っていく様子を読者に感じさせます。

v.49 「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」

少年イエスのこの唐突な返事に、新しいメシアの時代の到来を私たちは感じさせられるのです。

v.50 「両親にはイエスの言葉の意味が分らなかった。」

しかし、やがて神の御業を信じて受け入れて行く聖家族のことを私たちは思います。主イエス・キリストがおられるところは、“父なる神の家”、すなわち“神殿”に他ならないことを、私たちも信じています。私たちが主イエス・キリストにその祭壇でお会いする(ヘブ13:10)ミサ……。共に集まってミサをささげてい

る群(Ⅰコリ3:16)……、そのいずれをも“神殿”と呼ぶことができます。

v.50 「両親にはイエスの言葉の意味が分らなかった。」

私たちも、直ぐには聖書を通し語りかける神のことばが分からないことがあります。時代を取り巻く不信仰の力が私たちを不安に陥れ、神の子イエス・キリストの「然り」(Ⅱコリ1:19-20) にアーメンと唱和する勇気を挫くこともあるでしょう。しかしそれでも教会は今、主の降誕の恵みのと祝福の中で、この期節のミサを共にささげているのです。 アーメン、ハレルヤ。